

## 135. 昭和59年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その1

本年度も滋賀県下では多くの発掘調査が実施された。例年のとおり滋賀県埋蔵文化財センターが3月9日にスライド発表会を催したが、その発表に基づき、調査担当者に御無理願ってその概要を簡単にまとめた。すべてについて収録できたわけではないが、調査報告書が刊行されるまでの速報として、調査の一端を窺知いただければ幸甚である。

### 1. 湖底で古墳時代の炉跡検出

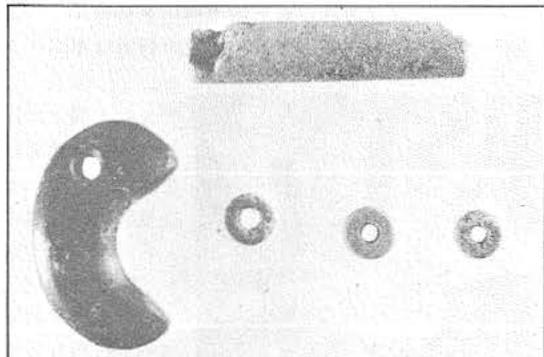
#### 彦根市地先 多景島湖底遺跡

多景島湖底遺跡は、昨年度に引き続きオーミマリン棧橋建設予定地の事前発掘調査を実施した。調査区はオーミマリン棧橋付近の湖底に4か所(P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>:水深3m、P<sub>3</sub>水深8m、P<sub>4</sub>水深12m)に設定した。

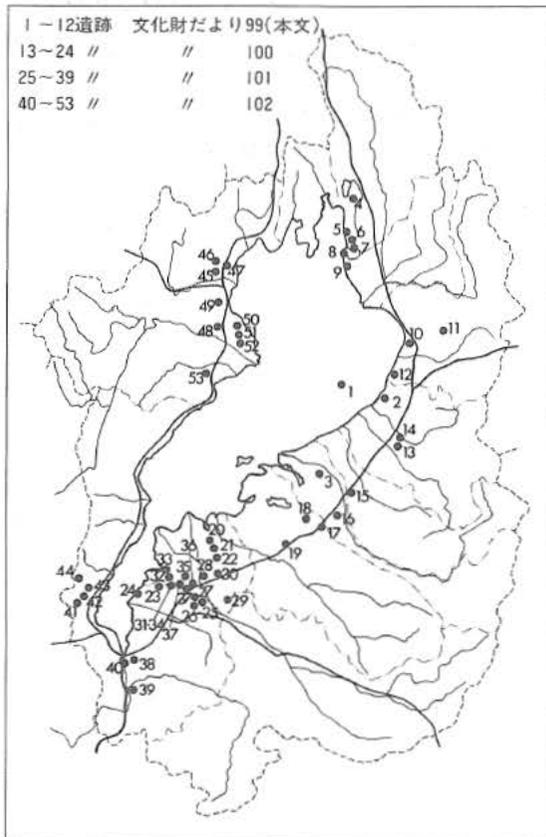
調査は、湖底に位置する遺跡調査のため潜水による調査方法をとった。また、ジェットリフトを使用してグリット内を掘り下げ、遺物の出土と土層を確認しつつ、写真撮影と実測を果していく方法をとった。今回の調査では、水中調査用の平板を製作し平板実測も試みた。

出土遺物は、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、金属製品の出土が多くあり、下層部では、弥生土器、縄文土器の出土も見られた。

層位は、第1層がレキ層で40cmの厚みがあり、近世



出土遺物



遺跡位置図 位置図の番号は、本文と同じです。の遺物も含んでいるが空き缶、ビールびん等も含まれている。第II層は、10cm前後の厚みで礫を含む灰色の砂層である。この層からは近世の遺物を中心に出土している。第III層は、灰色砂層で(砂利を含む)第II層と同様に近世の遺物が出土している。第IV層は、10cm前後の灰色砂層である。この層は平安時代の包含層で、須恵器、土師器、灰緑釉陶器、黒色土器、スラグが出土している。昨年度の調査では、炉跡と想定する遺構が検出されているが、今回の調査では、この層からの遺構は検出できなかった。第V層の上面では、古墳時代前期の土師器と共に炉跡が検出できた。第VI層では少量の弥生土器、第VII層では縄文土器がそれぞれ出土している。

本年度の調査では、T.P81m前後で平安時代の包含層がみられ、T.P80.5m付近で古墳時代前期の炉跡等が検

出された。これらのことを考え合せてみるとこの地点が陸地化していたと想定でき、琵琶湖の水位の変動を考える場合、極めて重要な遺跡であると考えられる。

(滋賀県教育委員会 丸山 竜平

・ 滋賀県文化財保護協会 喜多 貞裕)

## 2. 古絵図と合致した豪華な御殿

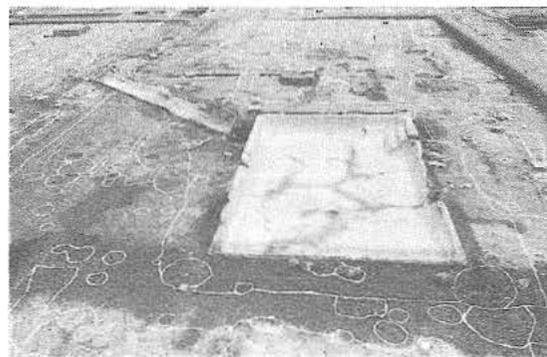
彦根市 彦根城表御殿遺跡

表御殿跡は、彦根城天守がそびえる彦根山のふもと、表門跡を入った箇所にある。元和8年(1622)頃までに造営され、一部増改築を施しながらも、江戸時代300年間の風雪に耐え、明治10年前後に解体された。

発掘調査の結果、表御殿跡は全体として残り具合が良好で、絵図とも良く合致していることが明らかとなった。絵図は、建物の様相を異にする2種が遺存しており、検出遺構の状況からその新旧関係が判明した他、さらに新しい時期の建物群が確認された。以下3期(I~III期)に分けて遺構の概要を記すことにしたい。

### <I期>

古い絵図に合致する建物群で、表御殿建築の基本を形作るものである。玄関にあたる式台に始まり、寄附を経て表書院・奥書院の両書院造りの建物がL字状に大規模に広がっている。礎石抜き取り跡から、表書院は13×11間、奥書院は12×8.5間を計る。建物下には亀腹風の処置が施され、建物の四周には石組みの雨落ち溝が廻っている。寄附の北には、笹之御間と表御座間が連なり、最も奥まった箇所に台所がある。台所に西接して大型の井戸1基を検出した。縦板を円形にならべて井筒とする井戸で、井筒はしだいに径を小さくしながら5段が確認される。この井戸の南には円形の土壇があり、最深部から長崎貿易銭76枚を一括出土した。表御座間の北には、さらに御客座敷が鈎の手状に連なり、その奥に局が2棟をならべる。両局間で検出した井戸は、石を円形にくりぬいて井筒とする極めて精巧なもので6段あり、以下縦板を円形にならべた井筒がつく。



能舞台等検出状況

### <II期>

I期の建物群をベースに、新たに能舞台・日本庭園、そしてそれを見下す御茶所など接待用の著大な建物が加わる。能舞台は、舞台とそれにいたる橋掛りからなり、両下には漆喰製の槽が設けられている。音響効果が考慮されたのであろう。日本庭園は江戸時代前期以降に特徴的な回遊式庭園で、池端に林立する庭石も豊富である。築山には数寄屋と待合の建物が確認できる。

御茶所を始めとする接待用の建物は、礎石抜き取り跡が大規模で、細かい箇所にもいたるまで絵図と良く合致しており、絵図の信憑度がうかがえる。この建物から局にいたる各坪庭には、漆喰製の小さな池が合計5か所に設置されている。最深部には金魚の寝床かと思われる甕を埋めている。

### <III期>

調査区北東端に新たに建て加えられた、絵図にない一連の建物群である。礎石抜き取り跡が大規模で、丁寧な造りの建物が予想される。現状では建物の全容を確定しがたいが、御客座敷などの解体後、御茶所等の建物群と併存していたものと考えられる。

(彦根市教育委員会 谷口 徹)

## 3. 古代祭祀遺構等の検出

能登川町今・柿堂遺跡

柿堂遺跡は、能登川町大字今の県道大津・長浜線が愛知川にかかる手前西方に位置する。昭和59年度より数次にわたって調査を実施する予定であるが、以下に昭和59年度調査分の成果を概述する。

検出された主な遺構は、方形周溝墓・掘立柱建物・自然河道・条里制地割溝などである。方形周溝墓は、最大巾17mの規模をもち、周溝を共有しながら数基存在するものと考えられる。主体部は検出するにいたらなかったが、周溝より出土した土器によって弥生時代中期のものと思われる。自然河道は弥生時代と考えられるものと、奈良時代末~平安時代前期に比定できる2本が検出された。後者は、最大巾約8mを測り、杭を打ち込んだ堰状遺構が数か所で検出されたが、遺構上面が削平されているのでその用水の行方は不明である。



川の中のしがらみと曲物の蓋

また土器・木器・獣骨などの遺物が出土したが、特に墨書土器・斎申・人形木器・舟形木器・獣骨がセットで出土しており、河川で行われたと考えられる祭祀に

関する貴重な資料である。

他に盤・曲物・杭・矢板・砧などの木器類の出土は多数にのぼり、今後の整理に期待される。

条里制地割に伴う溝は、巾約2～3m深さ約0.7m前後で、現在の地割をほぼ踏襲している。この溝に囲まれる坪内の遺構は、昭和60年度以降の調査範囲であるため明らかではないが、条里制下の水田形態解明が待たれる。

ただ今回の調査では、平安時代後期の掘立柱建物が一棟検出されており、今後の面的調査の中で性格づけができると思われる。

(能登川町教育委員会 山本 一博)

#### 4. 須恵器の大形器台が7個体出土

高月町洞戸 洞戸朱塚遺跡

洞戸区共同墓地新設に伴い、従来より現在の墓地が瓢箪塚・饅頭塚古墳として周知され、鉄刀・玉類(個人蔵)の出土があり、町教育委員会においても踏査にて器台・甕等の破片を採集しており、主に墳形の確認のため調査を実施した。

調査は、わずか約150㎡程であったが、古墳の基底部と考えられる遺構が検出された。すなわち、この古墳の東部の1部、後円部北東隅から前方部南東部端が確認され、現在墓地として残存する土盛はごく一部であることが判明した。そして、墳形としては前方部が短く大きく開く形態を呈し、後期古墳の範疇に入ると想定される。この形態は現在近江では類例を見ないものである。

遺物は、基底部の裾及び周濠かとも思わせる黒色粘土質の沼沢状土層最下層を中心に須恵器の大形器台7個体(内3個体ほぼ完形)、広口壺(完形)、杯(完形を含む)等及び土師器の壺(完形)、砥石、石鏃(縄文時代か)、植物遺体などが、くびれ部より前方部にかけて出土している。くびれ暗部では須恵器の底部穿孔の甕(ほぼ完形)が検出された。これらはいずれも破壊され細片化しているがかなりまとまった状況で出土しており、祭祀後、故意に墳丘周辺に投棄されたと思われる。また、7個体分もの器台がみつかり、しかもそれぞれの個体が形態、手法、胎土、色調等を異



遺物出土状況

にする事実の特記すべきことであろう。なお、これらの遺物は6世紀前半より末葉にかけてのものであり、具体的プランは不明であるが墳形との時期と合う。

今回の調査はごく限られた部分のみであり、なお、調査・研究の余地は十二分にあり、今後期待するところは大きい。(高月町教育委員会 黒坂 秀樹)

#### 5. 弥生時代末～古墳時代前期の集落跡

高月町重則 大森遺跡

余呉川右岸、重則宮山より河川に沿って舌状にのびる砂礫層から成る微高地上に立地する大森遺跡内であるヤンマー大森工場の増設(約2000㎡)に伴い調査を実施した。試掘の結果、調査対象区域の東(A)西(B)の端にて多数の弥生時代中期～平安時代前期の遺物が出土した。中央部は配管工事等にて掘乱されていた。

A地区は既存工場建設の際に整地等によりかなりの削平を受けており、明確に遺構と判断でき得るものはなかったが、わずかな落ち込みがあり、多量の弥生時代中期～古墳時代初頭の遺物が出土し、かつて周辺に遺構の存在したことを充分にうかがわせた。

B地区では、竪穴住居1棟、溝状遺構5条、ピット群(2間×2間の建物が1棟たつ)が検出された。少量の古墳時代後期～平安時代前期の遺物が上層にて混じるが、下層からは弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土しており、遺構も全てこの時期のものであると考えられる。

この遺跡は、余呉川にて形成される河岸段丘上に立地することは既に周知であるが、高時川右岸の遺跡群は基本的に淡黄茶褐色粘質土層を遺構ベースとして比較的安定した土壌をベースにしているのに対し、粗い砂礫層及びそれに沖積した薄い砂質土層を遺構ベースとしている。これが、この遺跡の特徴であり、存続期間に影響を及ぼしたと思われる。また、丹塗りの土器が破片であるが比較的多く出土している点もこの遺跡を考える材料として充分であろう。

(高月町教育委員会 黒坂 秀樹)



遺構検出状況

## 6. 古墳時代後期～平安時代末の集落跡

高月町高月 高月北遺跡

高月中学校グラウンド拡張（5000㎡）に伴い、事前に踏査したところ、須恵器・土師器を多数採集し、遺跡が存在する可能性が高いと判断した。協議の結果、擁壁・U字溝等地下に影響を及ぼす部分を調査し、他地区はそのまま盛土して整地することとした。

調査は拡張地区の東西南北端全てに幅約3m～5mのトレンチを設定して実施したところ、南端のトレンチを除き、他のすべてのトレンチにて遺構が検出され、古墳時代後期末～平安時代末までの集落であることが確認された。

この遺跡は、大きく東西の2グループに分かれ、その間の地区では水田跡と考えられる遺構（株痕等）が検出された。両グループともに竪穴住居、掘立柱建物、土壇、溝が検出され、始まりと終わりを共にすると思われる。

東グループでの注目すべきことは、平安期と思われる約50cmの方形掘方をもつ建物（5間×？間）が確認され、北陸本線を東側に越えると田渡岸寺関係の遺跡が存在すると推定されるのを考えるとこれに関連する遺構とすることも可能なことであろう。遺物の中には解説できないが、墨書土器（灰釉陶器）も出土している。

西グループでは、7世紀後半の竪穴住居の1棟より鉄滓が出土している。この住居の集落内での社会的位置を示すものであろう。

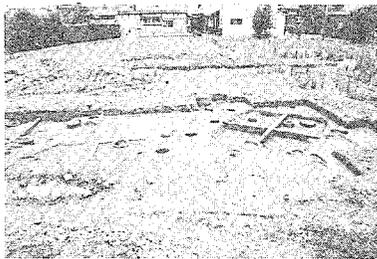
なお、東グループは東側と北側に、西グループは南北にその分布がのびることは明らかである。

（高月町教育委員会 黒坂 秀樹）

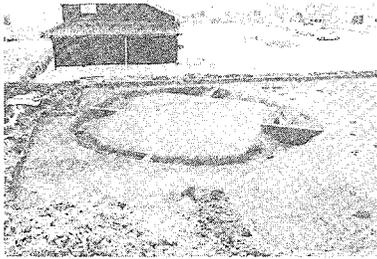
## 7. 大複合遺跡の一端を検出

高月町高月 高月南遺跡

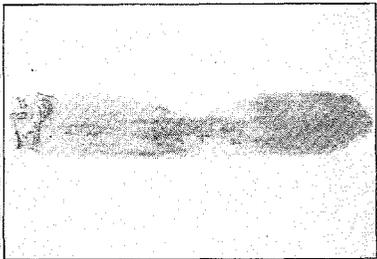
SGSエンジニアリング工場増設に伴い、従来より子持勾玉（重美）を出土した遺跡（4000㎡）を発掘調査中である。現在調査継続中のため、詳細は後の機を待たねばならないが、弥生時代後期の竪穴住居2棟（方形1、円形1）、弥生時代末～古墳時代初頭の方形周



建物跡検出状況



方形周溝墓



出土馬形

溝墓5基以上が検出され、集落と墓域の関係が解明される遺構として認識された。なお、方形周溝墓の内1基が、周溝の外周が不定円形を呈している点、時期とともに注目される。

また、重複して古墳時代後期～平安時代末の集落跡が確認された。竪穴住居20棟以上、掘立柱建物10棟以上が見つかり、他に溝・井戸・土壇等がある。この中で興味をひくのは、6世紀初頭～8世紀前半の竪穴住居が7棟連なり、第II期のムラの竪穴住居の変遷がある程度つかむことができることである。また、平安期の素掘りの井戸でまわりに河原石を配したと思われる遺構があった。遺物では、奈良時代前半と思われる溝及び同時期の住居跡を中心に小鍛冶滓が多量に出土し、鉄鎌・鉄釘といった製品も出土している。また、7世紀末頃の掘立柱建物の1つの柱穴底より、須恵器のミニチュア短頸壺が出土しており、地鎮具に使用されたものと思われる。なお、その周辺で数点であるが、瓦片が見つまっている。

現在調査中の地区は来年度5月まで行うが、今後同じく工場新設に伴い、約25000㎡を2～3年かけて発掘調査する予定である。

（高月町教育委員会 黒坂 秀樹）

## 8. 「人形」「馬形」等の祭祀遺物を出土

湖北町尾上地先 尾上湖底遺跡

尾上湖底遺跡は、湖北町尾上地先の湖岸辺りにあり、余呉川河口部の南側に位置している。周辺には、葛籠尾湖底遺跡や尾上浜遺跡などの湖底遺跡があり、山本山の中腹には後期の古墳群などがある。又、尾上東側にある津ノ里からは、古瓦と共に窯壁片などが出土し、寺院跡と瓦窯跡の存在が考えられている。

今回の調査は、水資源開発公団による湖岸堤管理用道路建設に伴う事前発掘調査として行われた。前年度の湖北町教育委員会による調査地の西隣りに、今回の調査地がある。前年度の調査では、標高82mの地点より、人形が数点出土しており、今回の調査でも木製品の検出に期待が持たれた。調査の方法としては、30m×15mのトレンチを設定し、地盤が砂地でもあることから、鋼矢板で四方を囲んだ。

調査の結果、上層では、旧尾上荘関係の廃棄物が多量に混入しており、また尾上荘の構造物が残っており、北側の1/2程は調査ができない状態であった。中層では旧砂浜を検出し、多量の陶・磁器が出土した。その中には、縄文土器や須恵器片もあった。木製品としては、下駄が数点出土している。下層では、木製品が多量に出土した。この下層の上面が、標高82mである。ここからは、人形9点、齋串7点、馬形1点などの他に、折敷の破片なども出土した。人形には墨書で、顔をかいてあるものなどが2点あった。また、馬形は墨書で顔を描きさらに「黒毛祓」と書かれていた。この意味については、今後の研究に課題を残したと言える。

(勸滋賀県文化財保護協会 奈良 俊哉)

## 9. 弥生前期の土器包含層を検出

湖北町延勝寺地先 延勝寺湖底遺跡

延勝寺湖底遺跡は、湖北町延勝寺地先の湖岸辺りに位置している。付近には、今西遺跡や早崎Ⅰ・Ⅱ遺跡などの湖岸遺跡が集中して存在している。

今回の調査は、水資源開発公団による湖岸堤管理用道路建設に伴う事前発掘調査として行った。現地調査は、昭和59年6月1日より始めて、同年7月10日に終了した。調査の方法としては、調査範囲が南北に約1kmと長いために、3m×3mの規模のトレンチを10m間隔で基本的に設定し調査した。また地形上調査区を便宜的にA、B、C3地区に別けた。

調査の結果、B地区にある延勝寺墓地の中世石造物は、周辺より集められたものであることが判明した。

C地区では、第1トレンチとした所で、上層より、雁股式の鉄銚や、須恵器、土師器などが出土した。また下層では、弥生時代前期（Ⅰ様式）の甕や壺の破片が多量に出土した。この層には、他の時期の土器などの遺物が含まれていなかった。そこでトレンチを拡張したが、遺構は検出されなかった。第2トレンチとした所の上層からは須恵器や陶・磁器が出土したが、包含層と考えられるものではなかった。また第5トレンチからは、柱状木製品が、削られた面を下にして、立

った状態で検出されている。ここでもトレンチを拡張して柱穴などの木製品と関係するような遺構の検出を試みたが、検出できなかった。また同時に石垣の調査をC地区にある石垣で、実測と断面観察を行った。石垣は西面が長さ20m、北面6m、南面3mである。高さは約1.6mほどである。石の積み方は乱雑で、裏込めなども径5cmほどの丸石を栗石として使われていたぐらいであり、あまり堅固なものではなかった。

(勸滋賀県文化財保護協会 奈良 俊哉)

## 10. 弥生時代中期～中世の豊富な遺構群 近江町高溝地先 法勝寺遺跡

国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査の最終年度にあたり、法勝寺・狐塚遺跡がその対象となった。

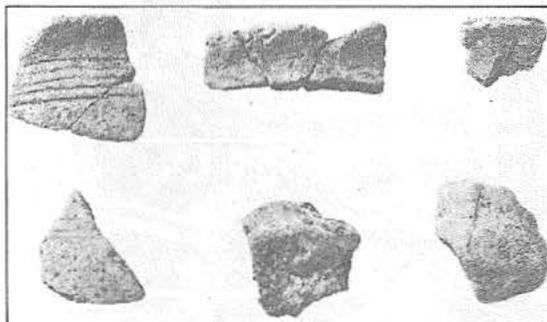
法勝寺遺跡は本来、白鳳時代の寺院の存在が推察されているが、その詳細については不明である。今回の調査区はその西端にあたり、現在南北には水田が広がるが、ほとんどが荒地で水田面より一段高い。

表土下0.6mに弥生時代後期中心の土器包含層（暗茶褐色土）が広がり、さらに0.2m下に砂礫層がベースの遺構検出面に達する。遺構検出には非常に労を要したが、主な遺構は、弥生時代中～後期の方形周溝墓6基、古墳時代後期の円墳、平安時代の掘立柱建物9棟以上及び井戸等が確認されている。その他に無数のビット群、南北にのびる近世の溝状遺構2本、南北34m×東西24mの方形にめぐる溝状遺構がある。後者は西辺のみが切り離されており、中世の屋敷跡をめぐる施設かと考えられる。

遺物は方形周溝墓に伴うものを中心にして弥生時代～古墳時代の土器が比較的豊富で器種もバラエティに富む。

また、直径20m余りの円墳の存在は近接する狐塚遺跡の3基以上の小規模古墳（昨年度確認）とともにこの一帯に古墳群を形成していたことを推察させる。

掘立柱建物は一辺1m余りの方形の柱穴をもつ4×2間の建物をはじめ、規模的にまちまちで6×4間、4×3間、3×1間以上がある。



出土土器



方形周溝墓

井戸は直径 0.8m 余りの丸木をくりぬいて4分割したもので下半はまわりを青灰色粘土でとりまいている。

狐塚遺跡は昨年度調査区の北50mにあり、弥生時代後期の溝・土壇、平安時代の掘立柱建物2棟を検出している。(勸励賀県文化財保護協会 吉田 秀則)

## 11. 奈良～平安時代の地方官衙

### 山東町年吉 北方田中遺跡

北方田中遺跡は、伊吹山の南側に広がる山東町年吉に所在し、東海道新幹線で米原駅より名古屋方面に向かい、最初に通り返ける横山遂道の南に位置している。

周辺には、前方後円墳の瓢箪山古墳や円墳などが、集中して存在している。また、大鹿などでは古瓦が表採されており、県教育委員会による遺跡目録には、道照寺遺跡とされている。さらに大字菅江には須恵器古窯跡がある。このように周辺には注目される遺跡が集中して存在している。

今回の調査は、県営ほ場整備に伴う事前発掘調査として行われた。調査は昭和59年9月25日より同年11月13日まで行った。途中で、遺物包含層と遺構を確認するためにトレンチを拡張し、遺跡の性格と範囲確認のため面的な調査を行った。

調査の結果、タテ1m×ヨコ1mの方形の掘り方を持つ掘立柱建物群が11棟と、タテ50cm×ヨコ50cmの掘り方を持つ掘立柱建物群が14棟検出された。前者の規模の大きい柱穴を有する建物は、南北方向に走る溝との切り合い関係と出土土器より奈良時代末に比定され、後者の規模の小さい柱穴を有する建物群は平安時代のものである。掘立柱建物群の他の遺構では、上述した南北方向の溝や門跡などがある。また、鎌倉時代(13世紀)の井戸を検出した。井戸の中には、土師器の皿や箸などと共に呪符木札が出土した。この呪符木札には「急々如律令」、「水」、「永」などの文字が墨書されていた。これは井戸の鑿泉に伴う呪符であると考えられる。

本遺跡は建物の配置や、遺物などから、この地方の



掘立柱建物跡

郷長の役所・屋敷と考えられる。

(勸励賀県文化財保護協会 奈良 俊哉)

## 12. 縄文時代早期の屈葬人骨が出土

### 米原町磯 磯山城遺跡

当遺跡は室町時代の山城跡と考えられていたが、調査の結果城跡に伴う遺構や遺物は確認できず、予想だにしなかった縄文時代の遺物が多量に出土した。このなかで特に注目されるのは2体の屈葬人骨の出土である。墓壇は確認できなかったが、人骨出土層及び人骨周辺で出土した土器は茅山式、粕畑式に相当する縄文時代早期末葉のものであり、人骨の年代もこの時期と考えられる。2体のうち1体はほぼ埋葬時の原形をとどめていたが、その葬法は通常の屈葬とはちがひ、仰向けにした遺体の足をまっすぐに伸ばしたまま腰の部分から2つ折りにした、エビ折り状の屈葬であった。これは現在のところ全国でも初見の埋葬方法であり、縄文時代の埋葬法を研究するうえで有益な資料となるものである。この人骨は眉弓の隆起度から男性であり、身長は165~170cmと高く、年齢は頭蓋の縫合や椎体の老人性変化より40歳代と推定される。また歯は異常に磨耗しており、縄文人の食生活のきびしさがうかがいしれる。もう1体は腰より下のみしか残存していないが、ひざを折りまげた通常の屈葬であったと思われる。

次に遺物に目を向けると、土器では縄文時代早、前、中、後、晩期の各時期の土器が出土しており、特に早期高山寺式土器と早期末葉の土器群は県下はもとより近畿地方における縄文土器研究の指標となろう。石器に関しては、その石材をサヌカイトは二上山産を、黒曜石は隠岐島久見産のものを用いており、縄文人の交流の広さに驚かされる。自然遺物ではイノシシ、ニホンシカ、カモシカ、魚類の骨が多く出土しており、当時の食生活がうかがえる。このように磯山城遺跡はまさに縄文時代の博物館と呼べよう。

(米原町教育委員会 中井 均)



人骨出土状況